

前立腺肥大症日常診療マニュアル 改訂第3版

Roger S Kirby and Peter J Gilling 原著

勝岡洋治 訳

＜書評者＞ 本間之夫（東京大学医学部泌尿器科学教室教授）

前立腺肥大症は中高齢の男性に多発する疾患である。泌尿器科医にとっては最もなじみ深い疾患であり、一般社会からも最も泌尿器科的な疾患と考えられているだろう。それ故に、前立腺肥大症については診療レベルを常に Update しておく必要がある。この度出版された「前立腺肥大症日常診療マニュアル」は、その目的に最適な本である。

本誌は、この分野の世界的大家である Kirby 博士と Gilling 博士による、その名もズバリ Benign Prostatic Hyperplasia という本の翻訳である。初版は 2001 年であり、この度の出版は、原著は第 7 版、日本語誌としては改訂第 3 版となる。原作の特徴は、いわゆるアメリカ的というか、とにかく内容や書き方が実践的であることであろう。それを訳したこのマニュアルにもその特徴が生きていることは当然であるが、単なる翻訳本ではないことにも注目すべきであろう。訳者の勝岡洋治博士による日本語がこなれているというだけでなく、わが国の諸学会が出している各種のガイドラインや用語集を尊重して、日本人により使いやすくなるような工夫が随所になされている。

内容を順に見ていくと、まず疾患の一般的で基本的な事項として、疫学や病因に関する知識が提供されている。続く診断では、症状の質問方法からはじまり前立腺癌の鑑別にまで話題が及ぶ。その中でも PSA の取り扱いに関する記述がとくに注目に値するであろう。治療に入ると、内科的治療では使用される多様な薬物について個々に解説するだけではなく、併用治療の方法やその意義づけも明確にされている。外科的治療では、TURP を初めとする旧来の手術以外に、いわゆる低侵襲性治療とされるレーザー治療などの最近の治療方法が紹介されている。各治療の解説に続いて、より実践的な解説として治療方針を決めるときの考え方も書かれており、これがなかなかである。具体的には、経過観察や生活指導も有力な治療オプションとなりうること、治療は有効かどうかだけではなくその効果の大きさを加味すべきこと、治療の当たっては性機能への影響についても同時に配慮すべきことなどである。更には、治療を行ううえで今後考えていかななくてはならない諸問題についても述べてある。すなわち、治療に要する費用、長期的な治療効果、随伴する前立

腺癌、診療を担当する医師の分業体制などである。また、最近では、前立腺肥大症は前立腺の疾患として単独に扱われるというよりは、性機能やメタボリック症候群を含めた男性の健康（Men's Health）の中で、それを構成するひとつの疾患として捉えられるようになってきている。このマニュアルにはそのような新しい観点も盛り込まれているのが特筆される。

最後に訳者による追録として掲載されている 3 つの話題も魅力的である。男性の下部尿路症状の把握のためにもっともよく使われている IPSS については、その重症度の取り決めが解説されている。治療に関しては、デュタスタリド治療にともなう PSA の扱いなどに関する注意点や、ごく最近にわが国でも承認されたタダラフィルの作用機序や臨床効果について、いずれもその要点が要領よくまとめられている。

これらを通観して感じるのには、この本が一貫して患者のために、常に患者を意識して書かれているということである。このマニュアルは、前立腺肥大症の診療に関わる全ての医師や医療関係者にとって座右においてしばしば参照すべき資料として誠に適切な書籍であり、これ以上のものは望めないであろう。ご一読をお勧めしたい。

●B5 頁 104 2014 年 10 月

定価：本体 3,000 円＋税

[ISBN978-4-86517-077-1]

医学図書出版刊